

「東大で教えた社会人学」

草間俊介・畑村洋太郎 著

本書は、東京大学工学部の人気講座を単行本化したものである。

「技術者に必要な社会常識，経済常識」という講座を「産業総論」という授業の中で展開したもので、既に10年以上の歴史を持つ講座とのことである。講師は東大工学部を卒業し、商社に勤務している草間俊介氏で、商社マンとしての知識と経験を生かした講義で、その内容も適時性に富み多岐にわたっている。

しかし、何故に大学生にまでこの様な講座が必要なのだろうかとの疑問は湧いてくる。私を含めて、工業教育に身を置く人々は、自分の専門とする技術解説に重きを置く傾向が強かった。確かに工学に関する技術解説は必要不可欠なものであり、その基礎となる力学などの授業には力が入るが、それぞれが独立したものとなってしまう、産業全体や技術の全体像を捉える視点に欠けていたことは反省しなければならない。本書には、過去に出来上がったものを愚直になぞっていく授業と、そのために視野の狭い卒業生を世に出してきたことへの反省から、「社長になれる技術者」を育成したいとの想いが滲んでいる。

過去における事故や失敗を分析してみると、会社を動かすトップマネジメントに技術的な理解が不足していることが指摘されている。しかし、技術者の多くはマネジメントに関する訓練を積んできていない、技術者こそマネジメント能力を磨くべきである、そのためには広い視野をもった技術者の育成が必要であるというのがこの講座の狙いである。

確かにこの様な座学が有れば、産業や技術

の世界にとどまらず、人の動き、組織の在り方、経済の動き、金の動きなど広い視野で社会の全体像を捉えられる人材の育成は可能であろう。また、企業に就職し年齢が進めば、現場の仕事より組織のマネジメント能力が要求されるし、企業戦略へ参画せざるを得なくなる。これまでのように、与えられた生産と研究開発だけに成果を上げ、自分の専門領域の範囲だけで満足し、企業内の人事や経済等に無関心で居られる時代ではない。

本書では、①働くことの意味と就職、②会社というもの、③サラリーマンとして生きる、④転職と起業、⑤個人として生きる、⑥人生の後半に備える、と六つの章立てになっているが、各章ごとに最新のデータが駆使され、講師である著者が商社マンとして海外を駆けめぐった経験を基にした見解も述べられている。例えば、安価な労働力を求めて中国へ進出する企業が多くなっているが、ここでは思わぬ支出を強いられることも多く、相手国の文化を熟知した判断を行う必要があることが述べられている。また、技術のブラックボックス化は必須であるとして、海外では、技術を見せない、しゃべらない、触らせないの徹底が必要であるなど、人の良い日本人の意識改革にも触れている。

今でもそうだと思うが、我々が学校現場で授業に携わっていた頃は、授業の合間にこの様な話を生徒に言ったり聞かせたりしていたものである。本書を読んでいると、この様な話をしたことがあるなど、懐かしく当時の授業風景を思い出させてくれる反面、この様なことも言っておけば良かったと反省させられる点も多い。その意味からも、本書に目を通して自分の考えをまとめたり、生徒に話をする際のヒントなどが得られれば良いと思う。

(文芸春秋社、平成17年1月、288頁、1470円) (毛利昭)